



TITLE:

合本組織の發達：中國近世における 生業資本の貸借について補遺

AUTHOR(S):

宮崎, 市定

CITATION:

宮崎, 市定. 合本組織の發達：中國近世における生業資本の貸借について補遺. 東洋史研究 1955, 13(5): 419-420

ISSUE DATE:

1955-01-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/139017>

RIGHT:

合本組織の發達

——中國近世における生業資本の貸借について補遺——

宮 崎 市 定

私は嘗て本誌第十一卷第一號に、副題の如き小論を掲げて、中國近世の都市における企業の資本が多くは甚だ零細であることを述べた。其後同誌の合評會があつた時、天野元之助博士から、資本の零細化には、同時に共同出資、即ち合本の組織が伴う筈だから、その事實を探索するという註文を受けた。これは誠に尤もなことで、共同出資は、相互に資本を貸しつづ借りることを意味するから、當然この標題の下に取上げなければならなかつたわけである。併し當時はまだその準備が出来ていなかったが、其後少し宛、史料が集つてきたので、不十分ながらこれを紹介して、前説を補いたいと思う。

先ず北宋においては、續資治論鑑長編卷一七六・至和元年（一〇五四）七月の條に、殿中侍御史馬遵なる者が誣言して、

茶賈の李士宗が、司門員外郎の劉宗孟と、商販を共にした

と申立て、これに宰相梁適を連座せしめようと計つた事實を載せている。ここに云おうとした共商販の内容は恐らく共同出資の意味と思われるが、まだ十分の熟語となつていない所を見ると、北宋中期には、恐らく合本組織が既に行われながらまだそれ程盛でなかつたと推察される。

南宋に入ると、宋會要稿・刑法二ノ一〇七、紹興十二年（一一四

二）八月の條に、客旅が茶貨を私販して准を渡ることを禁じた詔を載せ、

若し火伴を糾合し、財を連ね本を合し、或いは連財合本に非ずして糾集同行するの人たちが、仲間うちにて（數内）自ら相告發する時には本罪を興免する。

と言っている。ここでは連財合本が一つの成語となつてゐるから、南宋初には既に合本が相當盛んに流行してゐたのであろう。但しこの文章だけから見た感じでは、それは臨時的なものでらしく、堅固な長期的な共同出資とは受け取れない。

下つて明代になると、祝枝山全集卷十九、承事郎欽君墓誌名に、蘇州吳縣の商人、欽允言（一四六七—一五〇六）の履歷を叙し、次のような注意すべき記事を載せてゐる。

其の業は商賈の資本を總べ、之を機杼家に散じ、而して其の端匹を斂め、以て商に歸するを主るなり。盈縮低昂を計會し、而して之を出入す。刻時に審度し、彼此以て濟す。皆信委帖服せり焉。

これは既に單なる資本貸借の域を脱して、絹織物同業組合銀行とも云うべきものに成長してゐる。併してこれとても同じ頃、西方地中海沿岸諸國に、相當進んだ銀行業務が行われていたことを思えば別に驚くに當らない。ただ中國に於ては政權の保護がなかつた爲か、その後の發達が挫折してしまつたのは惜しむべきことである。

欽允元は絹商人の資本を集めて、之を機織業者に前貸したのであるが、明末の上海には、外來の客商に一時資本を立用する買辦御問屋があつた。褚華の木棉譜に

明季、從六世の祖、長史を贈られし公あり、陶猗の術に精なり。

秦晉の布商、皆其の家を主とす。門下に客たるもの常に數十人あり。之が爲に肆を設けて收買し、その將に行李を戒めんとするの時を俟ち、始めて銀を估して布を與え、捆載して去らしむ。其の利甚だ厚し。故を以て富一邑に甲たり。國初に至り猶お然り。近ごろ商人乃自ら會計の徒を募り、銀を出して采擇す。而して邑の利する所の者は、惟だ房屋の租息のみ。

とあつて、買辦卸問屋の前貸し制が、清朝嘉慶頃には行われなくなつたことを傳えている。

清朝の初期には小規模な手固い合本組織が至る所で見られた。朝鮮丁鋪の欽欽新書卷七、劉時俊首從申詳の中に、恐らく乾隆頃と思われる裁判事件を引いて、その解に

合本共店とは、周・姚の二人が本錢を合して共に一店を設けしを謂える也。

と注している。なお道光廈門志卷十六、風俗の條に

數人を合して一店鋪を開き、或いは一船を製造すれば即ち姓を金とす。金は猶お合のごとき也。惟だ廈門・台灣も亦然り。

とあり、同書卷五洋船附洋行の條に

道光元年、厦防同知麥祥の詳に稱す。洋行和合成の陳班觀、年老いて資竭く。蔣元亨を擧げて自ら代らんとするに、將軍祥の批駁を奉じ、一時人の承充するなし。議して商行の金豐泰・金萬成・金源豐・金恒遠・金瑞安・金源泉・金長安・金豐勝・金元吉・金源益・金源瑞・金普祥・金源發・金全益等の大小十四家をして、公同に貢燕黑鉛等の項を承辦せしめんとす。

とある中の、洋行和合成はもちろん金某某という十四の商行の名は、

個人名ではなくして字號(屋號)であり、それらの凡てが合本と思われ、その資本にも相當大きなものがあつたと想像される。なお前述の合本で一船を製造することは、藍鼎元の鹿洲公案卷下西穀船戸の條に

船戸の李德とは、黃奇昌・黎阿二の公共の名に係る。

とあり、これは潮州人の黃・黎二名が合本で一船を製造した上で持主の名義として假空の李德なる名を用いて登録したことを指す。この事は雍正初年の事實であるから、清朝初期から合本共店、合本共船のやり方が全國的に普及していたと見て差支えないであらう。

通觀するに以上の史料から見る限りでは、中國の合本は古く宋代から始まっているが、それは合資企業的な色彩が強く、株式企業的な性質が見られない。五港開港以後、株式組織が西洋を模して造られても容易にそれが成功しなかつたのは、もともと中國の傳統にそれが無かつた爲であらうと考えられる。

以上甚だ貧弱な資料ながら、これによつても大凡その合本組織發達の大勢は覗われるであらう。就中、祝枝山全集の記事は注意すべきものがある。なお、明代の合本組織の史料として、片山誠二郎氏「明代海上密貿易と沿海郷紳層」(歴史學研究・一六四號・二五頁)、藤井宏氏「新安商人の研究」(東洋學報・三六卷三號・三三六頁以下)に貴重な記事があるが、ここに轉載する餘白がないので、原書について見られたい。